

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第3号 2007/5/21 発行

たかとりコミュニティセンター・紹介

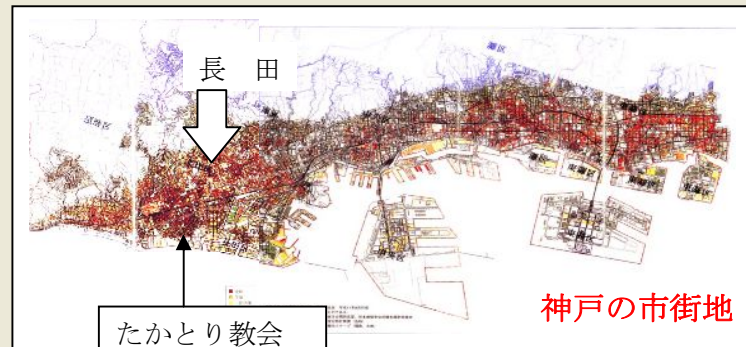
在日外国人が多住するまちで、生まれ育った TCC

神戸という「まち」・長田という地域

神戸は、海と山にはさまれた細長い市街地と国際的な港湾を有する日本を代表する港町である。

1868 年安政条約によって開港され、港に面して居留地と山手に外国人の居住地が造られた。そして欧米人さらには中国人など多数の外国人が流入、それに伴って外国の文化も持ち込まれた。その後神戸は港の発展と造船・鉄鋼・機械などの工業の発達を中心に日本有数の重工業都市に成長していく。こうした都市発展を支えるため、農村から多くの人々が流入したほか、沖縄・奄美から、そして台湾や朝鮮半島などアジア諸国からも働き口を求め、あるいは強制的に神戸に移り住んだ。西洋人、中国人やインド人が主に中央区に居住したのに対し、コリアンは中央区だけでなく長田区を中心に西部の市街地にも多住することとなった。

そして 1970 年あたりからは、在日コリアンの多住する長田区に沖縄・奄美の人々や難民としてのベトナム人・日系ブラジル人・南米人・東南アジアの人々が多住するようになり、アジアの色濃い多文化な地域となっていった。震災時の長田区は、人口 13 万人の中に 28 カ国 1 万人以上の外国人住民の暮らす街であった。そんな神戸市長田区の西のはずれに鷹取教会はあった。



そして 1970 年あたりからは、在日コリアンの多住する長田区に沖縄・奄美の人々や難民としてのベトナム人・日系ブラジル人・南米人・東南アジアの人々が多住するようになり、アジアの色濃い多文化な地域となっていった。震災時の長田区は、人口 13 万人の中に 28 カ国 1 万人以上の外国人住民の暮らす街であった。そんな神戸市長田区の西のはずれに鷹取教会はあった。

大震災・・そこから活動が始まった

地震はそれらの歴史的経緯と日常の中に埋もれていたものをあぶりだした

震災直後たくさんの救援ボランティアが来た、血縁・地縁・在日コミュニティ・そして専門家たちの熱い思いが鷹取教会の土地に集まってくる。この土地ならではの救援活動が、カトリック鷹取教会敷地内につくられた「鷹取救援基地」を拠点として展開されていった。

一つの出会いが次の出会いをつくり、一つの活動がいくつかの活動に細胞分裂していく。そして気がついてみると「FM わいわい」「ツール・ド・コミュニケーション」「まちの保健室」「アジア女性自立プロジェクト」「多言語センター FACIL」「ワールドキッズコミュニティ」「神戸定住外国人支援センター」の 8 つの組織が、「まち」に向かってそして「ひと」に対して働いていた。

NPO 法人たかとりコミュニティセンター

2000 年にはこのようなグループで形成される特定非営利活動法人「たかとりコミュニティセンター」となった。キーワードは「多文化共生」。センターの活動には、地域に住むいろいろな人たちが様々な場面でボランティア参加しており、その数は 500 人を超える。国籍を超え、震災という共通体験で結ばれた地域住民のまちづくりへの思いは深い。

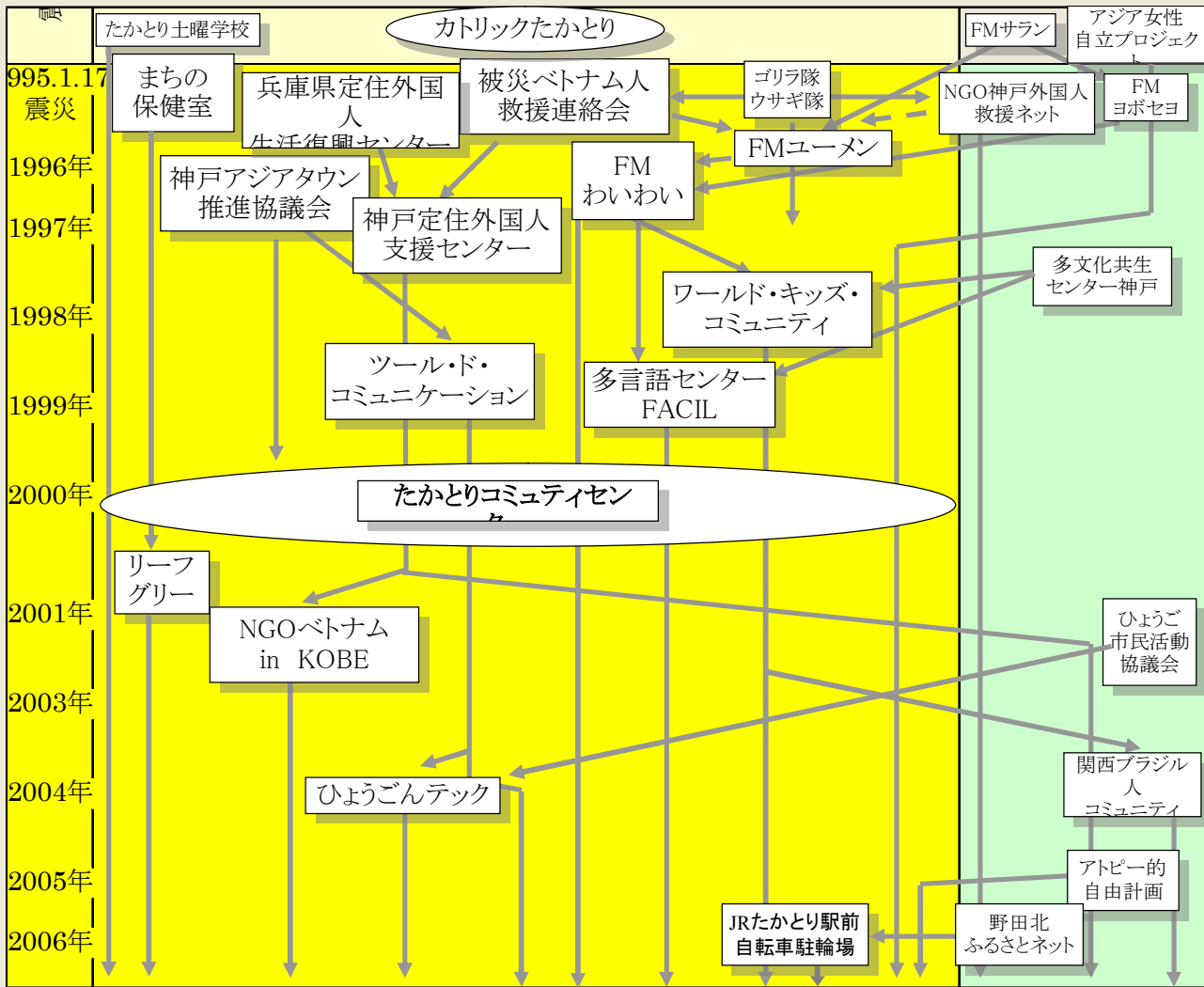
その後も新しい出会いがあり、新しいエネルギーが流れ込み、新しいアイデアが生まれ、新しい細胞分裂が繰り返され、そして今 10 のグループが活動している。

- たかとり土曜学校 外国の子どもたちに日本語補習学習
- FM わいわい 10言語で地域生活情報を発信

- リーフグリーン 高齢者、障害者の暮らしの支援
- ツール・ド・コミュニケーション パソコン、ビデオで地域活動支援
- NGO ベトナム in KOBE 在日ベトナム人コミュニティ
- 多言語センターFACIL 翻訳・通訳事業のコーディネート
- アジア女性自立プロジェクト 外国人女性の自立生活への支援
- ワールドキッズコミュニティ 多文化な子どもたちの育成支援
- ひょうごんテック 市民活動のためのIT支援
- アトピー的自由計画

新しい器で新しい出会いが

「まちが復興してから」という教会の再建もやっと実現した。そして今 TCC も新しい器を得て、新たな歩みを始めようとしている。
 「多文化共生」…震災という問題意識がなくなっても、課題は日常的に残るだろう。これからも新しい出会いが待っているはずだ。



たかとりコミュニティセンターの活動変遷

震災の出会いから生まれたコミュニケーションの豊かさ

神田裕講演から (2001年12月11日開催)

「市民セミナー寺小屋講演会記録より抜粋」

教会が燃えて、ボランティアの活動拠点に

震災のあった1995年の1月17日に、教会がつぶれて、燃えてしまいました。その翌日ぐらいから、もうすでにたくさんのボランティアといわれる見知らぬ人たちが、いろいろなところから被災地にやってきてくださいました。その中で鷹取教会にも顔を出してくださった人がいました。それが次第に膨らんでいって、ボランティアの人たちがたくさん集まることのできる場所になっていきました。

教会の敷地は650坪です。教会自体はもともと、信者さんが日曜日の祈りのミサに来るための場所で、信者さん以外の人、なかなか足を踏み入れる場所ではないのですが、震災後つぶれたということもあって、ボランティアの人たちが自由に出入りをして、そこを拠点にしながら活動を展開する場所になりました。

やはり場所があったということが、大きなことだったと思います。鷹取教会だけのことではないのですが、災害があって、多くの思いをもったボランティアの人たちが集まってきたり、地域の住民が災害から立ち上がっていくときに集まることのできる場所が必要だと思えます。

ほんとうに多くのボランティアの人たちが、鷹取の教会に来てくださいました。登録している人だけでも、4、5千人です。登録していない人も含めると、おそらく1万人ほどの人が、あそこを拠点にして活動してきたと思います。



神田裕、1958年生まれ、49歳の神父です。鷹取教会に1991年に赴任、神父になってほぼ20年になるのですが、そのほとんどがこの鷹取です。

震災前まではNGOの活動をしていたのではなく、神父の活動だけをしていた「普通の神父」でした。震災後TCCと共に歩み、いつの間にか首にタオルを巻くようになりました。

最初の拠点活動から鷹取教会救援基地へ

最初の活動は、周りのつぶれている家の柱を集めてきて、ボランティアの宿泊所を作り、そこで寝泊まりもしながら、周辺からいろいろな情報を入手していくことでした。最初の年の夏は、あの敷地のなかに180人ぐらいのボランティアの人たちが寝泊まりをしながら、活動を展開していました。たとえば、公設の避難所以外のところには、弁当などの物資が届かなかったのですが、そういうところを見つけて、いろいろな物資をもっていったり、炊き出しをしたのが、最初のスタートでした。それぞれ個々に集まってきたボランティアの人たちが何かができないかということで、自分たちで判断して、それを具体化して、情報も集めて、少しずつこうしたらいいのではないかと考えながら始まったのが最初です。それが次第に組織的な取り組みに発展していき、鷹取教会救援基地ということになって、仮設支援など住民たちへの具体的な支援が始まっていきます。

ボランティアの人たちが仮設住宅へ引越しの手伝いに行ったとき、仮設住宅は人の住むところではないという思いをもって帰りました。それなら実際に自分たちが必要と思ったものを作りだしていこうと、踏み台や手すりをはじめ犬小屋にいたるまで、いろいろなアイデアを出して仮設グッズづくりを一生懸命やりました。そのため当時鷹取木工所と言われたほどです。

それを始めると、全国からたくさんの木材が送られてきて、桧の産地である長野県の南木曾町が、町をあげて鷹取教会に木材支援に、10トントラックが10何台といった調子で3回ほど来てくれました。



吉富志津代です。震災前は南米の領事館職員でした。震災時の多言語ラジオ局FMユーメン(FMわいわいの前身)の立上げをきっかけに、多言語情報提供や青少年育成を切り口として、外国人コミュニティと協働した日常的な市民活動が仕事になりました。誰もが頑張れば認められる多様で楽しい地域に住みたいと思って活動しています。

まちの保健室そしてリーフグリーン

こうした活動と同時に、震災後1週間たった頃に、カトリックの組織も動きました。カトリック医療協議会が鷹取教会にプレハブの

臨時診療所をつくったのです。全国から延べ 4、5 百人の医者と看護婦が交代で来てくれて、そこを拠点に 3 ヶ月間無料診療をしました。その診療が終わったとき、地域のお年寄りの顔が見えはじめてきていたため、何か続けたいといけなのではないのかとなりました。そこで医者はいないが看護婦のシスターが一人常駐して、名前も臨時診療所ではなくて、「まちの保健室」として、仮設住宅のおじいちゃんやおばあちゃんに、いろいろなプログラムを考えた活動が震災後5年間ずっと続けられてきました。

そして仮設住宅がなくなった時点で、まちの保健室は閉じて、そこから立ち上がってきたのが、「リーフグリーン」という老人介護の NGO で、いろいろ試行錯誤をしながら有料で輸送サービスなどを行っています。

被災ベトナム人救援連絡会

また鷹取教会にはベトナムの人たちがたくさんいましたので、震災後の外国人の救援活動の1つの拠点にもなっていました。

震災後 2 週間ほどたった 1995 年の 1 月末頃に、鷹取教会にたくさんのベトナム人がいるというので日越友好協会や大阪外大のベトナム語学科の先生や学生たちが訪ねてきてくださいました。そこにもまた出会いがありました。鷹取の敷地の中で外大の学生たちや友好協会や難民定住センターの人たちとの出会いがあって、ばらばらに行動するのではなくて、一つになって行動しようということでも立ち上げたのが「被災ベトナム人救援連絡会」という会でした。

湊川公園や南駒栄公園には、ベトナムの人がたくさんテント生活をしていましたので、行政から流されてくる情報を、ベトナム語に翻訳して情報提供をする。また、行政の人を呼んで行政の説明会を通訳付きで行いました。そのほかは日常のケアです。そのような活動が、そこを拠点にしながら生まれていきました。

たかとりコミュニティセンターの中に、「FMわいわい」をはじめ、たくさんの外国人にかかわりのある、まちづくりの NGO が立ち上がっていますが、これらのすべての原点が実は被災ベトナム人救援連絡会です。



ハ・ティ・タン・ガです。インドシナ難民で日本に来て 14 年目に阪神・淡路大震災に遭いました。長く暮らしてきましたが、震災は初経験でしたので大変困りました。言葉の違いをはじめ、文化・習慣の違い、災害発生時のシステムもわかりませんでした。震災のおかげで気が付いたことがたくさんあります。在日ベトナム人を支援しながらこれらの問題を改善しようと思っています。

FMわいわい

大阪の生野区の猪飼野には在日の韓国の方がたくさんいますが、そこにミニFM局があり、そのスタッフが震災後長田へ来て、震災情報はほとんどが日本語でしたから、情報を外国語で流すことを目的で被災地にメディアをつくったのです。無許可でも出してもいい電波の範囲での放送局を、新長田駅の北側にある民団の事務所の4階で 1 月 30 日頃スタートしていました。(FM ヨボセヨ)

その1ヵ月後ですが、鷹取はベトナム人への支援をしているからベトナム人への情報をベトナム語で流さないかという呼びかけが FM ヨボセヨからあり、これが新しい出会いになりました。最初半信半疑でしたが、民団と話し合った結果、鷹取の教会にもう1つスタジオを作ってベトナム語の放送をすることになり、4 月 16 日にミニFMとしてスタートしました。(FM ユーメン)

ところがミニはミニでも電波の強いミニで、近畿電波管理局から再三注意を受けました。そのころ郵政省がコミュニティFMを奨励していましたので、それに乗って株式会社にすれば認可をとってFM局にすることができるという提示を受けました。それには最初は断りました。しかし、実は外国人の問題は震災という問題意識がなくなっても、日常的に残るだろうと考え直しました。それで少しずつ日常にターゲットを向けて、教会の中の組織が動き出しました。こうしてFMもちょうど震災一年たった1996年1月17日に、「株式会社FMわいわい」として正式に発足しました。

FMわいわいは被災ベトナム人救援連絡会が分派したものですが、それが現在は 8 言語で情報を提供するまでになっています。



日比野純一です。水産大学校で学び世界を旅した後新聞記者に。8年間の記者生活にピリオドを打った直後に阪神・淡路大震災が発生し、救援ボランティアとして神戸入り。神戸市長田区のカトリック鷹取教会内のたかとり救援基地(現在、たかとりコミュニティセンター)をベースに外国人被災者の支援活動に取り組み、1996年1月、日本発の本格的な多言語・多文化コミュニティ放送局「FMわいわい」の設立に参画。以後、神戸で多文化共生のまちづくりに取り組んでいる。1962年東京生まれ。

兵庫県定住外国人生活復興センター

もう一つは、長田の別の場所にあった兵庫県定住外国人生活復興センターですが、在日の韓国や朝鮮の人たちの震災後のケアをするためにやってきた1人の人がセンターを長田で立ち上げましたが、何ヵ月か活動しているときに、家賃などの活動資金の問題もあって移動しなければならなくなったのです。

そこで彼に出会って、それなら鷹取でということになりました。私たちはベトナム人の問題をしていましたし、彼は韓国の問題をしていましたから、長田に住んでいる外国人ということでテーマは同じです。最初同じ場所で別々に活動をしていましたが、そのうち一つになって、神戸定住外国人支援センターになっていきました。これも被災ベトナム人救援連絡会からの一つの流れで、出会いがあって、次のステップへいった例です。



金千秋です。震災から始まった「たかとり」での私のボランティア活動は、自分を見つめなおし又愛するこの「まち」をじっくり考える旅となりました。自分とは何かを考える事は、自分以外のたくさんの人について考える事となり、そしてその人々が生きる「まち」「社会」を考えることとなりました。いろんな方向からそして色々な思いを抱いて、「たかとり」に集う仲間と未来に希望をたくせる「まち」を創るため今日もFMYYのマイクに向かっています。

神戸アジアタウン推進協議会

もう一つは、名前だけ残って活動はしていませんが、神戸アジアタウン推進協議会があります。

これは新長田の北側の細田地区の区画整理事業のなかで、この地域はコリアだけでなく中国人やベトナム人などアジアの在日外国人の人が多いため、「アジアのまち」という特色を生かしたアジアタウンをつくらうとなりました。そこで、住民もいっしょになって神戸アジアタウン推進協議会を立ちあげて始まったのですが、ちょっとした人間関係からうまくいけなくなってしまいました。

私たちは韓国やベトナムの人たちへの支援活動をするなかで、救援活動はいずれ日常へと進んでいくという問題意識がありました。だから、アジアタウンをつくるというのは、自分たちの活動の次のステップへいけるのではないかという思いもあって、アジアタウンという新長田の北での動きを、こんどは鷹取へもってきました。そこでは、まちの多言語の看板づくりとか情報を多言語で提供していくという少し質の違う活動が続けられていきました。

たかとり救援基地

こうした活動は鷹取教会救援基地の体制で進んでいきましたが、震災後 1000 日が経ったとき、名称から「教会」をはずし、たかとり救援基地として再スタートをはかりました。

まちの保健室がリーフグリーンに変わるとか、アジアタウンが一つの役割を終えていく。アジアタウンの延長上で、その中から分かれてくるのが、コンピューターを使ったいろいろな情報提供の一つのセクションである「ツール・ド・コミュニケーション」とか、多言語の翻訳を専門にするセクションである「多言語センターFACIL」とか、震災以後あまりテーマにしてこなかった子ども、とくに外国人の人たちの子どもをテーマにした「World Kids Community(キッズ)」などの、次の細分化された活動へ分かれていきます。

たかとりコミュニティセンター

そして、2000年4月には、たかとり救援基地から、たかとりコミュニティセンターに名前を変え、8月には法人格も取得しました。たかとりコミュニティセンターは、1つの単体組織として何かをするものではありません。鷹取教会の中で活動するそれぞれ別のルーツを持つ 9 つのNGOが細分化しないよう1つにまとめること、そしてこれから芽生えていく動きをサポートするために縁の下の力持ちになることで、たかとりコミュニティセンターを法人格としてつくりました。

実はたかとりコミュニティセンターをつかったもう1つの理由は、教会という宗教法人の土地の上で、宗教法人にかかわらず活動を続けていくために有効と考えたからです。それでちょうどタイムリーにできたNPO 法人という制度で法人格を取得し、そこに私がかかわっていれば、宗教法人上の人事で動かされても、NPO 法人上でこれまでの活動を継続できるという、私個人の将来への思いも正直なところありました。

教会の組織としても、たかとりコミュニティセンターはこれからも存続するということは合意を得ていますので、誰が来ても無くなることはないのですが、NPO 法人は、そのための仕組みづくり、形づくりだったのです。

まとめ

たかとりコミュニティセンターが多様な活動を続けてきたルーツはすべて同じで、原点は 1 月 17 日です。

そこからいろいろな人たちが駆けつけてくださって、そこに出会いがあって、出会いがあればエネルギーがあって、エネルギーがあればアイデアも生まれてという、細胞分裂のような繰り返しでした。そういう繰り返しでいままで歩んできました。これからもきっと細胞分裂を続けていこうと思っています。

さあ、いよいよ新居で活動！



既存のベンチもペンキで化粧直し



手作りでベンチを製作するベトナムの人たち



FM わいわいの新しいスタジオ

台湾の皆さん、「多文化共生」は共通の課題、互いに交流を深めましょう
どうぞ新しい TCC へお越しください。

発行／たかとりペーパードーム台湾再生計画推進委員会

日本事務局 たかとりコミュニティセンター

E-mail : office@tcc117.org

台湾事務局 新故郷文教基金会

E-mail : land@homeland.org.tw

Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 第3号 2007/05/21 発行



ペーパードーム再生工事5月初め着工、9 2 1 震災8周年主体建築完成予定

ペーパードーム再生、動き出す

ペーパードーム再建、正式着工

新故郷社区見学センター内でペーパードームの再建工事が始まった！

新故郷基金会と工事を担当する五宝營造有限公司のメンバーは5月初め基礎の掘削にかかり、行程に基づいて各種工事を進め、今年9月21日の震災8周年には建築主体工事を完成させる予定だ。

ペーパードームの移築とその設計は延び、1年にわたる計画協議そして7次の設計提案を経て案が定まった。ペーパードームの建築敷地の選定もいくつかの曲折を経て、最後に埔里鎮桃米里に落ち着いた。そして、関係の施設許可の申請過程でも費やした1年近く……この期間、新故郷基金会は建設経費の調達に努力すると共に、将来の利用、運営方針の検討をおこなった。



ペーパードーム移築計画、敷地選定など、1年の討論を経て決まる

日本の阪神大震災後に地域の交流拠点の役割を果たしたペーパードームは、台湾で再生後も台湾のまちづくり(社区营造)活動を推進し、被災地の社区産業を育成・普及し、さらに台湾と日本の復興まちづくりの経験交流広場となる責務を担っている。

新たな生命への転換

ペーパードームの再生計画を担当する邱文傑建築師は、台湾新世代の優れた建築師として、その作品はたびたび台湾建築賞、遠東建築賞を獲得するなど、建築設計や都市空間計画に独特の味わいと視点を持っている。

「ペーパードームはもともと教会であったが、台湾へ移って再生した後は、新たな生命へと転換するだろう。」邱文傑建築師はその設計概念をこう説明する。紙の建築本体だけでなく、新たに加えられた別棟部分を含め、社区市場、多目的ホール、展示スペースなど、桃米地域の生活圏と密接な関係を持たせながら、来訪者が地域の息吹を感じ取れるようにしたい。

紙の建築につながる回廊沿いには、ペーパードームの静かな倒影を映し出す水池と、桃米の充滿する生命力を象徴する生態池がそれぞれ配置される。こうして、ペーパードーム本来の記念性や独自性を表すと共に、台湾の田野を愛するものの自然的要素を融合することができる。

邱文傑建築師は述べる。こうした設計によって、この歴史的な工事に対するさらに多くの解釈や物語を引き出し、さらに多くの人たちと分かち合えることを期待したい。

地域の期待

「台湾で唯一の紙管の建築が桃米に建つ、私たちは期待と誇りで一杯だ！」桃米の住民邱富添さんは言う。

紙の建築の独自性が人々を引き付けるだろうし、そこで新故郷基金会在自然農法や生態工法を広めれば、教育的で発展的な内容に富んだ、桃米が本来目指そうとしたエコツーリズム路線にも合致し、新たな発展の契機にもなりうるだろう。

「ペーパードームが完成すれば、その建築形式の新発想、環境の美的感覚によって、人々は啓発を受けるに違いない。」と邱富添さんは確信する。

鷹取ペーパードーム台湾再生計画推進委員で、当初からこの計画に尽力した一人である陳亮全先生は、工事の正式着工に際し期待をこめて語った。「台湾の震災復興は既に一段落し、新たな段階に入った現在、新故郷社区見学センターができることは、正に一つの新しい方向と経験を示すものだ。」

さらに、陳亮全先生は次のように指摘する。桃米は台湾の震災復興の著名な事例の一つで、ペーパードームがこの地に再生されることは、社区にとって大きな励ましと確信になる。特に重要なのは、ペーパードームが架け橋になって、台湾と日本の間、そして台湾の復興社区の間で、経験の分かち合いを繋ぎながら、友好をはぐみ続けることである。

試練を重ね、ペーパードーム再生は一步一步夢に向かって前進し、2007年9月21日には完工予定、その際には国際震災交流会など一連の行事を行い、日本の専門家、研究者、まちづくり活動家を招いて、震災再建の経験発表、両地の交流促進を図りたい。

日本の皆さん、共に歓声を上げるそのときを、私たちと一緒に期待していただきたいね。



計画を担当する邱文傑建築師は台湾建築界のトップランナー



現場で詳細打合をする新故郷小毛(左)と施工会社宋奇易さん



次々進む基礎工事



工事の状況

ペーパードーム再生工事の平面図

